九州産業大学国際文化学部紀要　第57号　35－64（2014）

滝沢克己『聖書を読む　マタイ福音書講解』の研究　その六（中）

富　吉　建　周・中　島　秀　憲

四

次いで、塚本虎二の「幸いな人たち」（マタイ五章３－12節）の解釈について、『イエス伝研究　第二巻』[1] に即して検討することにする。まず最初に「補講　山上の説教の読み方」を取り上げて、塚本虎二の「山上の説教」についての解釈の基本姿勢を確認し、それから、「山上の説教註解」の「第一　はしがき」（マタイ五１－２）及び「第二　幸いな人たち」（マタイ五３－12）、併せて「山上の説教七話」の「第三話　神に寄りすがる貧しい人」（マタイ五３、５）に触れることにする。

「山上の説教の読み方」において、塚本虎二は、「山上の説教」についての根本的な問題を次のように立てている。「新約聖書中一番人に知られていながら一番解釈が難しく、しかも実際的に大きな問題となるのは、マタイ五－七章のいわゆる山上の説教である。これは一体実行出来るものであろうか、どういう積りでこんな思い切り人間離れのした教えを説かれたのであろうか。絶対に無抵抗であれとか裁判するなとか、明日の食物の心配をするなとかいうような命令は、今日の社会では仙人にでもならない限り実行できないから、これは実行しなくてもよいものであろうか、それとも皆を仙人にするためのものであろうか。今日まで解釈の根本がきまらない。そこで今日は、私一流の解釈を全くの準備なしで話して参考に供したい」[2] と。そして、その根本問題を解くために、「山上の説教」の内容の大体と思想の流れを、次の如く、塚本虎二は要約する。「マタイは五－七章に言（ことば）による伝道、八－九章に業（わざ）による伝道を記しているが、前者はイエスの発言のうぎはぎ細工である。しかしその形から見てただ乱雑に並べたものでないことは、七24－27に全体の跋があることからも察知出来る。そしてこれに対する序言と見るべきものは五３以下の「幸福なるかな」であろう。13－16節の弟子たる者の覚悟［地の塩、世の光である君たちも迫害を忍んで善い行いをせよ。］はその付録で、17節以下がいよいよ説教の本体である。すなわち17－20節でその原理［君たちが善い行いをせねばならないのは、自分（イエス）が来たのは旧約聖書成就のためであるからで、君たちは学者、パリサイ人以上に立派でなければ天国へ入れな

い。］を、21－六18で旧約に対してイエスの教えが勝れていることを六つの例で、その実行が勝れていることを三つの例で示す。また実生活訓として宝を地上に積まぬこと、生活問題を心配せぬこと［神の国だけを求めておればそれらのことは神が然るべく御心配下さる。］、人を裁かぬこと［自分も神から同じ裁判を受けるから。］の三つを掲げ（六19－七６）、その後にこれらすべてを実行する力の鍵［求めよ、父なる神は必ずその祈りを聴いて下さる。今まで述べられた色々の命令、戒め、勧告は実行困難のように見えるが、神に願い求むれば必ずそれを実行する力が与えられる。］を与え（七７－11）、最後に全体を締め括る黄金律［「だから、何事によらず自分にしてもらいたいと思うことを、あなた達もそのように人にしなさい。これが律法と預言書と（聖書）の精神である。」で、説教全体の精神を示したものであろう。人にして貰いたいことは結局愛であるから、愛が旧約の精神である、自分はその完成のために来たのである。］を掲げ、愛の実行が旧約の完成であることを示して（12）本論の初めに戻る。あとは付録（七13－23）と跋（七24－27、説教全体の結び）である。／それならば一体何が説教の中心思想であるか。右に説明した全体の構成からすれば、旧約の総約である愛の完成を言う黄金律が中心思想となる。説教全体が、大体［説教の地上生活・実践に関わる限り］ここに焦点があるようである。殺すなかれ、姦淫するなかれ、誓うなかれ、悪人に抵抗するなかれ、敵を愛せよ、裁くなかれがことごとく愛の律法であるのは言うまでもなく、幸福なるかなも大体これに帰し、五16の善き行為もこれを指すものと見ることが出来る。……そして旧約律法の完成を説くイエスの教訓が愛に帰一することは当然である（ロマ一三８－10「なぜなら、“姦淫してはならない、殺してはならない、盗んではならない、人のものを欲しがってはならない”など、このほかどんな掟があっても“隣の人を自分のように愛せよ”というこの一言に帰するからである。愛は隣の人に悪事を働かない。だから愛は律法の完成である。」参照）。またこのことはイエスの全教訓、全事業、全生涯と一致する。／しかし、愛の実行それ自身が目的ではない。これは天の父の如く全くなって（五48）、天国に入る資格を得るための手段である。すなわち、如何にして天国に入るか、これを教えるのが山上の説教全体の精神である。そしてこの〔天国に・信仰に関わる〕観点から説教全体を見る時、その一言一句ことごとくここに焦点していることを発見する。すなわち真の幸福は天国に入ることであり、そのためには地上では不幸な生涯を送りまた天国の民たる資格をもつべきことを教える幸福なるかながそれであり、旧約の律法を実行して天国で大いなる者となることを勧めるのがもちろんそれである。殺すなかれ以下六つの、遙かに旧約道徳を凌ぐ、一見実行不可能とさえ見える高きキリスト教道徳を説くのも、畢竟（ひっきょう）天の父の如く完全になって天国に入らんがためである。／人間相手でな

くただ神相手に、施しを為し、祈り――主の祈りが天国本位であり終末観的であるのはもちろんである――また断食すべきことを言うのがこれである。地上に宝を積まず天上にこれを積んで常に心を天に置くことを勧め、地上の生活を思わずただ神の国の義を求めよというのも、神に裁かれざらんために裁くなというのももちろんこれである。また必ず与えられるから求めよ、必ず開かれるから門を叩けと言うのも、これを天国に関するものと解することができる。付録の狭き門は天国への門であり、七21－23［「わたしに「主よ、主よ」と言う者が皆、天国に入るのではない。わたしの天の父上の御心を行う者だけが入るのである。」］は最も明らかに天国本位であり、終末観的であることを示している。最後の岩の上と砂の上の家の譬は最後の審判の日における姿を描いたものと見る時、その意味が最も明瞭である。／もし右の見方が正しいとすれば、山上の説教は天国に入る道を教えたものである。すなわち、天国本位に生き、天に宝を積むことだけに専念して、地上のことを考えるな、否地上では貧しい者、悲しむ者、飢え渇く者、また迫害される者であって、ただ柔和と義と憐れみと平和とを求めよ、一言にして言えば、すべての人を愛して神の如く完全となり天国に入ることを求めよ、というに帰する。飽くまでも来世的また終末的である。しかし同時に極めて現世的であって、地上生活において今までかつて説かれたことのない最高水準の道徳人たれと教える。極端に来世本位であると同時に極端に現世的であるところにイエスの他の教訓と同じく山上の説教の特徴［来世的・終末的・天国本位的と現世的・地上生活的の二元論］がある」[3]と、塚本虎二は山上の説教の精神を要約する。

そして「山上の説教」についての以上のような解釈に基づいて、塚本虎二は、「果たしてかかる最高水準の道徳が実行可能であるかどうか、これが問題である」と「根本」の問題に論を進める。即ち、「山上の説教は天国に入る道を教えたもので、一方では天国の生活を憬（あこが）れさせるためにこの世的に不幸な生涯を勧め、他方では天国人たるの資格を準備するための最高水準の道徳人たれ［神の如く完全となれ］と教える。前者は誰にでも出来ることであるとしても、後者は果して実行可能であろうか。例えば腹を立てることは相手の態度如何にかかわらず殺人と同視されて地獄の火の裁判を受けるとある（五21以下）。もしこれを言葉通りにとるならば、誰一人として天国に入り得る者は無いであろう。また敵を愛せよと言う（五43以下）。もし愛するということが義務ではなく、親が子を愛するようなほとんど本能的の純愛を指すものであるならば――イエスの意味はもちろんそうである――これは本能への反逆であり観念自体の矛盾であって、実行不可能である」[4]と。――この「根本」の問題に対して、塚本虎二は次のように、実行可能である、イエス・キリストを信ずるならば、と答える。即ち、「可能であるばかりでなく実行は極めて容易であると考える。何故か。イエス

は次のように言われたからである。「疲れている者、重荷を負うている者はだれでも、わたしの所に来なさい。休ませてあげよう。わたしの心がやさしく、高ぶらないから、わたしの軛を負うてわたしの弟子になりなさい、そうすれば魂の休息が得られよう。わたしの軛は甘く、わたしの荷は軽い。」（マタイ一一23－30）と言われたからである。この言(ことば)が嘘でない限り［塚本虎二の「信仰」］、説教はいかに実行困難に見えても、誰でも負い遂げられる軽い軛でなければならないはずである。そしてこのことはイエスの福音が弱い小さい、厳格な律法に耐えない人たち相手のものであることを考える時、むしろ当然である。わたしの信ずるところによれば説教が福音であって律法でないこと、すなわち、「律法はモーセをもって与えられたが、恩恵と真理とはイエス・キリストをもってあらわれた」（ヨハネ一17）ことを忘れ、イエス［神の子・キリスト］をもってモーセ［預言者］に代わる新しい立法者と考え、説教をその新立法の宣言と見たところに根本の誤りがある。そしてこんな解り切ったことがどうして今日まで解らずにいたかがわたしに解らない。説教は他のすべての新約の道徳と同じく、律法でなくして福音である。裁かんとするものでなく、救わんとするもの［イエスを神の子・キリストと信ずることによって救われること］である。しかしこれを守って救われるのでなく、救われた者が喜びと感謝とをもって守るもの［守る力を信仰によって神から与えられる］である。奴隷の如く恐れをもって守るのでなく、自由人としてこれを守るのである（ロマ八15「神の霊によって導かれる者は皆、神の子なのです。あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥(おとしい)れる霊ではなく、神の子とする霊を受けたのです。この霊によってわたしたちは、「アッパ、父よ」と呼ぶのです。」、ガラテヤ五１「この自由を得させるために、キリストはわたしたちを自由の身にしてくださったのです。」）。わたし達に律法は無い。律法はわたしたちの主人でなく、わたし達がその主人である（マタイ一二８）。義務として守らず、救われし者の特権として守る。このことは山上の説教を守らなくてよいというのでない。それはもちろん完全に守らなければならない。しかし律法でなくして福音である以上、これを形式的に一点一画の末まで守ったからとて完全に守ったのではない。右の頬をうたれたならば左を出す、しかし時に相手の左の頬をはりとばすことによって、かえってこの誡を完成する場合があり得る。福音であるからである。それでも果してこれを守り得るであろうかと愚かな人たちが尋ねる。もちろん守り得る。出来ないことを命じられるわけがない。求めよ、与えられると約束されたではないか。わたしよりもっと偉い業をすることが出来るとまで言われたではないか（ヨハネ一四12）。出来ると信じて行えば必ず出来る。否、既に出来ているのである（マルコ一一22以下「イエスは言われた「神を信じなさい。はっきりいっておく、だれでもこの山に向い「立ち上がって、海に飛び込め」と

言い、少しも疑わず自分の言うとおりになると信じるならば、そのとおりになる。」)。しかしたとい出来ずとも、その故をもってわたし達は裁かれない。道徳を完全に守るのが目的でなく、天国に入るのが目的で、これはその手段に過ぎないからである。また救いに漏れない。律法でなく福音であり、行い［地上のこと］によらず信仰［天国のこと、神の子キリストのこと］によって救われるからである。」[5] と、塚本虎二は、山上の説教が、信仰によって、実行可能であることを断言する。

以上によって我々は、塚本虎二の「山上の説教」を解釈する基本姿勢を確認することができた。つまり「山上の説教」は神の国に入ることを目的とした、その為の隣人愛を地上で実践することを手段とした福音であるので、「天国に入る道を教えること」をその精神としているものであるから、この精神を「山上の説教」の解釈の視点・観点として、塚本虎二はそれを解釈するのである。実際に、我々は既に、塚本虎二が「幸福なるかな」を次の様に解釈していることを知っているのだ。「山上の説教は天国に入る道を教えたものである。すなわち天国本位に生き、天に宝を積むことだけに専念して地上のことを考えるな。地上では貧しい者、悲しむ者、飢え渇く者、また迫害される者であって、ただ柔和と義と憐れみと平和とを求めよ、一言にして言えば、すべての人を愛して神の如く完全となり天国に入ることを求めよ、というに帰する」[6] と。或は「３－12節にいわゆる「幸福(さいわい)なるかな」がある。消極的に、この世で幸福でないため天国にあこがれる者、積極的に、天国人の資質をもつ者を幸福であるという。結局天国に入り得る者が幸福であると言うのである」[7] と。

かくて、塚本虎二の「幸福(さいわい)なるかな」（マタイ五１－12）についての詳細な解釈を検討することにする。「はしがき（マタイ五１－２)」に関しては「「弟子たち」――マタイではまだ弟子の選任（一〇１以下）なく、ただ二組の兄弟だけのようであるから（四18－22)、彼の教えを聞く者という広義の弟子の意味であろうか。説教の内容から判断すれば、一般民衆への伝道でなく、既に相当の期間彼に師事した者を相手とするようである。とにかく弟子を聴衆の主とし、集まった群衆を従とする。「口を開き」――大説話を予想する。かつてはモーセその他の預言者が神の言(ことば)を語ったが、いまは言となった神の子自らが語られる（ヘブルー２)。ルカは「イエスは目をあげ」という（六20)」[8] と。

まず、「幸いな人たち」（マタイ五３－12）全体について。「普通にBeatitudesと称する。真の幸福の何であるかを示して、これを追い求むべきことを訓(おし)える。イエスの伝道の実際的なるを見よ。幸いな人たちは明白に３、４、５（？)、６、10（？）及び５（？）７、８、９の二種類に区別される。前者は地上生活において不幸なる者、後者は善徳を有(も)つ者である。前者はただ神を思い、神の国を慕い求めざるを得ざるが

故に、後者は神に似たる尊き性質をもつが故に、いずれも神の国を嗣ぐことが出来るから幸いであるというのである。」[9] と、塚本虎二は要点を押える。

3節について。「ああ幸いだ、神に寄りすがる貧しい人たち、天の国はその人たちのものとなるのだから。」「3－10節はみな同じ形式である。最初に「ああ幸いだ」、次に幸いな人の誰であるか、最後にその理由が述べられる。ルカも同一形式であるが、マタイの第三人称複数に対して第二人称複数である。（従ってマタイは「心の貧しい者は幸いだ」、ルカは「貧しい人たちよ、あなた達は幸いだ」と読むべきである。）マタイが原形であろうという。（「幸いだ」は普通第三人称として用いられる（ルカ一〇23、一一28、一四15、ヨハネ二〇29、ヤコブ一12、黙示一四13等々。Bultmann, Gesch. d. syn. Trad. 114)。ルカは22－23に合わせるため人称を変更したらしい。）ただしマタイにても11－12は第二人称である。」[10] と。

「「ああ幸いだ」――μακάριος 多幸なるかな、至福なるかな。「ああ禍だ」に対する。普通ヘブライ語の「幸福なる」（申命三三29、詩一1）に当る。しかしこのギリシャ語に盛られたイエスの幸福観は旧約の詩人、預言者たちのそれより高い。その幸福が何んであるかは第三段の理由において明白である。天国に入ること、そのことが幸福である。従ってこれは幸福者の讃美であると同時に、幸福の定義である。律法と威嚇によらず、幸福の宣言をもってその伝道を始めたところは、人類の救い主たるに適わしい（ルカ二10－11)。この一句は彼の全福音の結晶である。」[11] と。

「「神に寄りすがる貧しい人たち」――言葉通りには「貧しい人たち　霊に［おいて］」である。「心の貧しい人たち」あるいは「霊の貧乏人」などと訳されている。「貧しい人」の原語は「乞食」を意味する。従って乞食が人の袖に縋らねば生きられぬように、神の助け無しには生きられぬ霊的の乞食、精神的ルンペンをいう。「その内的生活に関して哀れなる不幸なる状態にある者」（マイヤー)。しかし客観的よりは主観的であるから、むしろ「自ら何も出来ないのを感じて乞食として神の前に立つ」（ツァーン)。ルカ一八9－14の譬にある税金取りがこの最も善き説明である。本節は善徳の讃美でなく、欠乏者に対する慰藉の約束である。ルカにただ「貧しい人たち」とあるのがこれを証明する。イエスはイザヤ六一1の「貧しい人」を意味されたのであり、当時ラビ達からアム・ハアレスと言いて軽蔑されていた気の毒なる人々を指されたのであろう。「霊に［おいて］」――本訳では「神に寄りすがる」と意訳した。ルカの「貧しい人たち」の誤解（ルカも貧困それ自身を讃美するのではない。）を虞れて添加されたのであろう。しかしアム・ハアレスは物質的の貧困者というよりは、パリサイの学者のように律法知識も無く、いわゆる善行も出来ぬ階級の人々を指すため（ヨハネ七49)、ルカもマタイも内容上の差違はあるまいと言う者がある（シトラック―ビラ

ベック)。」[12] しかし、塚本虎二は、マタイが「霊において」を添加したのは「貧しい人」の内的・主観的「心霊の状態」を強調するためであると受け止めたのであるが、それはマタイの意図ではないとして、その解釈を撤回する。即ち、「ところで今ルカの場合を考えると、貧乏人は幸福である、神の国に入るから、の意味であるとすると、そこに二つの誤解の危険がある。第一は貧乏人でありさえすれば、誰れでも、たとい神を信ぜずとも、神の国に入れるという誤解。これはもちろん問題にならないが、しかしそう誤解する人もあり得るので、マタイが「霊における」をつけ加えたのである(後述)。第二は貧乏人、すなわち経済的に恵まれぬ者だけの意味であるとすると、それはあまりに狭い。イエスがその福音の対象にされたものはいつも「貧しい人」であるが、これが経済的に恵まれない者だけに限られるわけはない。従ってバウエルがプトーコスを定義して、「経済的に面白からぬ状態を指すだけでなく、こんな考えを含んでいる――この世において圧迫され失望していて特に神の助けを必要とする者」、と言うのは正しい。すなわちここで貧しい人というのは、イエスの時代に「土民」(アム・ハアレス）と呼ばれた階級の人々である。これは一般に下層民であるが、それだけでなく、律法を学者、パリサイ人が考えるように厳格に形式的に守らないため、彼らから人でなしのように軽蔑され、圧迫されていた人たち、すなわち、税金取りとか罪人（町の女の類）とか、異教人などを含むのである。このトー・ハアレスをイエスが幸いであると呼んで祝福されたことは、彼が好んで彼らに福音を説き、ことにルカにおいては特にこれらの人が大事にされていることから見て、当然である。従ってルカ六20の貧しい人というのは、単に日本語の「貧乏な人」をもっては十分に訳出できない背景を持っている。しかし経済的に恵まれない者がその主な部分であろうから、貧乏人、盲人、片輪その他［ユダヤ］社会から軽蔑され圧迫されている気の毒な人たちを包容する意味で、私は「貧しい人」という訳語をそのままに残したのである。／マタイの場合は問題がより複雑である。普通に「霊における」が付け加えられたために、マタイでは貧しい人が霊的の意味となったものとして、もはやルカのように現実の一つの社会層の人々を指すのでなく、霊的土民、すなわち神に縋(すが)らねば生きておられない人々を指すものと解されている。しかし「霊における」がつけられたので、マタイはルカと全く違って、心霊の状態を指しているという解釈は当らない。もしマタイがルカのものの誤解を恐れてつけ加えたとするならば、これもルカと同じように一つの現実の社会層すなわち土民階級を指していると見るのが当然である。私の解するところでは、「霊における」を追加したのは、本来は無くともわかるものを念のため、誤解を避けるための老婆心から追加したのであって、これがあってもなくても意味は同一である。すなわち私の翻訳形式によるならば、マタイ　神に寄りすがる貧しい人、

ルカ　神に寄りすがる貧しい人、とすればよいのである。一度そうしてみたが、軽率な読者の誤解［ルカの方に本来なかった「神に寄りすがる」を、添加することによって、ルカの方も「心霊の状態」を表現しているという誤解］を恐れてやめた。すなわちマタイが「霊における」を入れたのは、ただ貧しい人は、それだけの理由で誰れでも神の国に入ることが出来る、という誤解を避けるためであって、結局両者とも現実の、世の下積みになっている階層の人々に呼びかけたものと解したのである。エン・プニューマチ「霊における」を「神に寄りすがる」と訳するのは、文字の上からはすこし無理であるが、実際問題としてはイエスが意味されたものに当っていると思う。」[13] と。つまり「霊における」の意味を理解できなかった塚本虎二が、それが「誤解を避けるために、念のために追加したものだ」と解った後にも、それを「神に寄りすがる」と訳語を残しているわけであるが、当然その意味するところが変って来ているのである。即ち、それは「心霊の状態」という主観的な意味でなく、経済的・身体的にも、精神的・宗教的にも、ユダヤの社会から排除されている、従ってただ神に、イエスに寄りすがる外に生きることのできない、土民階層の客観的現実的状態を意味しているのだ。即ち「貧しい人、悲しんでいる人、踏みつけられてじっと我慢している人、飢えている人は幸いである、神に寄りすがる以外に術のない人であるから、すなわち天国が約束されているから、という意味と私は解する」[14] と。

「「天の国はその人たちのものとなるのだから」――直訳「諸天の王国」。諸天は天と同義で、複数に特別の意味はあるまい。そして天は神の遠廻しの言い方であるから、マルコ、ルカにいう「神の国」と同義であろう（「天の国」はマタイだけに限られるが、(三十二回)、彼は「神の国」を四回用うる。)。天の国はかかる貧しき人に属する（マタイ一九23－24)。次節以下が皆「［かの日に］慰めていただく」というように未来形であるのに対して、本節だけが現在形であるけれどもいま既に天国を有しているとの意ではなく、他と同じく未来の約束であろう。ルカ六24［「だが、ああ禍いだ、富んでいるあなた達、もう慰めを受けたのだから」］がこれを示す。希望に生くる者が幸福者であり、幸福を前取りした者が不幸者である（ロマ八24、ルカ一六25)。しかし、神の約束には必ず保証がある。涙をことごとく拭わるるのは神の国来臨の時であるが(黙示二一114)、わたし達は泣きながらも天の国の前味を喜ぶことが出来る。最後に、マタイは第三人称をもって一般的に書いているけれども、11－12及びルカが第二人称をもって明白に示しているように、聴衆が「心の貧しい人たち」であったことを忘れてはならぬ――次節以下また同じ。すなわちイエスはこの世に不幸なる人たち、しかしその故に飢え渇くが如く彼の教えを求むるその弟子たちを慰め励まし希望づけられたのである。故に福音である。」[15] と。

４節について。「ああ幸いだ、悲しんでいる人たち、かの日に慰めていただくのはその人たちだから。」「「ああ幸いだ」の第二。「霊に貧しい人たち」に「悲しんでいる人たち」が続く。「悲しんでいる人たち」――「霊に貧しい人たち」、「義に飢え渇いている人たち」、「信仰［義］のために迫害される人たち」との権衡（けんこう）上、本節も同様に内的、霊的に解すべきである。従って単なるこの世的の悲しみ、パウロのいわゆる「この世の悲しみ」（第二コリント七10）を意味しない。またその人の信仰を前提とすることも言を俟（ま）たない。ルカは「泣いている人たち（六21）」と言って「笑っている人たち」（同25）に対立せしめて、かつ「貧しい人たち」、「飢えている人たち」と列記しているから、この方は言葉通りに泣き悲しむ者、地上生活に恵まれざる不幸者たちを指すと解すべきである。ただし事実上はほとんどすべての場合において、社会的に不幸なる者がマタイにいわゆる「霊に貧しい人たち」、「義に飢え渇いている人たち」等々である。ただ「悲しんでいる人たち」とあるから、出来るだけ広く解せねばならぬ。罪の問題だけに限る必要はない。自他いずれかに限定する必要もない。キリストを信じ敬虔をもって一生を過さんとする者（第二テモテ三12）に臨む一切の煩悶、苦難、不幸を嘆き悲しむ者を含むと解すべきである。「悲しんでいる人たち」が幸福であるとは観念自体の矛盾であるけれども、キリストの来臨によってすべての人生価値が顚倒したるクリスチャンの世界においては、むしろこれが常識である。」[16] と。しかし塚本虎二は、後にこの「内的、霊的」な「悲しんでいる人たち」の解釈を変更するにいたる。即ち「今までわたしは山上の説教の「ああ幸いだ」を解釈し、柔和な者や憐れみ深い者、心の清い者、平和を好む者と、貧しい者、悲しむ者、飢え渇く者との二つに分けて、前者は積極的、後者は消極的、前者はすでに天国における徳をもっているから幸福であり、後者はこの世に望みなく、天国に憬（あこが）れざるを得ないから幸福である、というように説明して来た。もちろんこれも真理であるが、このいずれも積極的に解して、消極的といった三つのものも天国における徳を指したものと解することはできないであろうか。柔和な者が幸福であると同じ意味において、悲しむ者が幸いであり得ないであろうか。わたしにはこのいずれもが天国における徳を言ったものと解する方がより自然であり、より聖書的であるように思われる」[17] と。つまり「貧しい人たち」が、内的・霊的な状態を意味しているのでなく、客観的・現実的状態（神に寄りすがる）を意味していると同様に、「悲しんでいる人たち」も内的・霊的、心霊の状態を意味しているのではなくて、客観的・事実的な意味であり、「悲しんでいる人たち」も天国における在り様、天国における徳を意味していると解釈するのである。

「「慰めていただくのはその人たちだから。」「その人たちだから」――かかる人だけが。次節以下また同じ。悲しまざる者は慰められない。故にルカは「ああ禍だ、今笑って

いる人たち」と言う。「慰めていただく」――消極的に悲しみの原因また対象を取り去られるばかりでなく、積極的に神の国において喜び楽しみ得ることを言う。「労役を止めて息(やす)み」(黙示一四13)、「涙を拭われる」(同二一４）ばかりでなく、神と偕(とも)に永遠の光に住むことができる。そして今悲しみ嘆く者だけにこの特権が与えられる。故に幸福である。従ってこの約束の完成はキリスト再臨の時である。ただし天国におけるこの約束を有(も)つ者は、地上において既にその前味を味わう」[18] と。しかし塚本虎二がこの解釈を撤廻したのであるから、「天国における徳」として「悲しむ」ということが在りうることになるが、その場合の「悲しみ」の内容については特に説明していない。

５節について。「ああ幸いだ、踏みつけられてじっと我慢している人たち、約束の地なる御国を相続するのはその人たちだから。」「「じっと我慢している人たち」――普通には「柔和な人たち」と訳されている。「柔和な人たち」は神に似通う善徳を有つ幸福者であって、前の二つの不幸なる幸福者に対する。詩篇三七11の引用である。協会訳にては「柔和な者」と訳されている。原意は「エホバとその御心に従う者」であるから、従順、謙遜、柔和、温順等をもって訳することができる。ただしここでは神に対する関係だけでなく、むしろ主として迫害者、圧迫者等の不正不義を怒らず、復讐せず、穏かなる心をもってこれを忍耐する者を指す。(なおわたしは後に「柔和な人」とする従来の解釈をとらず、「じっと我慢している人たち」と訳すことにした。ここはやはり「貧しい人」と同じ意味と解して、アルブレヒト訳の「沈黙の忍耐者」、ベフリン訳の「英雄的の忍耐者」にしたがった[19]。）イエスは柔和の王であった（マタイ一一29、二一５、なおイザヤ五三章参照)。「地を相続する」――「地」とはもとパレスチナを意味し、これを占領して神政国を建設することがイスラエル人の理想であった（創世一五７－８、申命一８)。しかし敬虔なる一人一人に与えらるる神の祝福、及びメシヤ来臨の時における幸福を総称して同じく「地を嗣ぐ」と言うた（詩二五13、三七９)。従ってメシヤを「世嗣」という（詩二８、マルコ一二７＝マタイ二一38＝ルカ二〇14)。新約もこの影響を受け、神の国に入ることを相続の観念をもって示している（マタイ一九29、二五34、ロマ八17、第一コリント六９－10、一五50、ガラテヤ三18、五21、ヘブル一14、ヤコブ二５、第一ペテロ一４等)。この世においては、嘆き悲しみつつ神の国のために重荷を負い遂ぐるとき、来るべき日にはその相続人になるのである。」[20] と。

６節について。「ああ幸いだ、神の義に飢え渇いている人たち、かの日に満足させられるのはその人たちだから。」「「義」――神意に合致した、神に喜ばれる態度。神の前に義(ただ)しき生活。単なる道徳的完全ではない。義なる神がわたし達に求め給う義しさである。それなくしては義なる神の前に出ることの出来ないものである。故にわたし達の霊はこれを求めて喘ぐ。「飢え渇いている」――飢え渇く如く熱望する。それな

くしては生き得ないため喘ぎ求める。旧約にも用例がある。ルカはただ「飢えている人たち」(21) と言い、「渇く」及び「義」を省く。従って事実上飢えている貧しきガリラヤの信者たちに、その苦難からも免れ得ることを約束されたのである。多くの学者はルカの方が原形であろうと言う。「満足させられる」――満腹させられる。霊的要求の満足をこの語をもって示した例は旧約にもある。何をもって満足させられるかを示さないが、もちろん義をもってである。願いが聴かれて神の前に完全なる者となり得ることである。単にメシヤ来臨の時における幸福に与ること、その時裁かれて義なりと定められることのみに限る説があるけれども、その必要はない。」[21] と。

７節について。「ああ幸いだ、憐れみ深い人たち、かの日に憐れんでいただくのはその人たちだから。」「「憐れみ深い人たち」――他人の不幸患難に同情しこれに助けの手を伸ばす者。「憐れみ」ἔλεος なる名詞はもと他人に臨む害悪に対する感動を意味した。次いでそれに対する同情憐憫、殊に裁判官の寛大なる判決等を意味するに至った。七十人訳においては主としてヘブライ語のヘセドの訳語として用いられ、人間相互の正しき、誠実なる関係、従って同情、憐憫、愛、また人に対する神の恩恵を意味した。新約においては、人間相互の関係において神の要求し給う好意、親切を言うた（例えばマタイ九13、一二７、なおホセア六６、ミカ六８参照)。親切なサマリヤ人がこれであった（ルカ一〇37)。また、神の人に対して示し給う恩恵もこの語をもって示される。すなわち神は「憐憫に富み給う」者であり（エペソ二４)、「大いなる憐憫」であり（第一ペテロ一３)、その憐憫は人類を救い給うことにおいて現れる（ロマ九15－18、23、一一30－32、第一ペテロ二10等々)。また「憐れみ深い」なる形容詞は新約においてはこの場合のほか一度キリストについて用いられている（ヘブル二17)。「憐れんでいただく」――何故幸いであるかの理由を示す。もちろん神に憐れまるるのである。犠牲よりも憐れみを好み給う神は、憐れみある者には憐れみをもって報い給う（詩一八25)。しかしここではそればかりでなく、最後の審判における憐憫を意味する。憐憫自身であり給う神の国に入るには、神の如く憐れみある者でなければならぬ。人の義は神の前に立つに足りない。憐憫の心に対して与えられる神の憐憫によるほかはない。」[22] と。

８節について。「ああ幸いだ、心の清い人たち、御国に入って神にまみえるのはその人たちだから。」「「心の清い人」――心の純な、真実な者。エペソ書にいう「真心」の者であろう（六５)。旧約聖書及びユダヤ教においては清潔が単に物的であって、すべての不潔、例えば癩病、分娩、死、不潔食、偶像礼拝に遠ざかることを意味したけれども、新約では純粋に内的、精神的である（マルコ七17－25)。従って「心の」は無くとも意味は同一である。多分３の「霊に」、６の「義に」等と同じくマタイの老婆心的追加であろうと言われる。ただし本節の「心」の原語はκαρδίαの「心情」である。「神にまみえる」

――最後の日において神と顔を対することが出来る（第一ヨハネ三２、黙示二二４）。心の清浄なる者のみが神を見得ることについては詩篇二四３－４、ヘブル一二14、ヤコブ四８を見よ。全く罪なき潔き者となることは最後の日にのみ可能である。もしわたし達がひたぶるに心を神に傾け尽して二心でさえないならば、最後の日にはすべての罪から潔められて神を目のあたりに拝し得るというのである。」[23] と。

９節について。「ああ幸いだ、平和を作る人たち、神の子にしていただくのはその人たちだから。」「「平和を作る人たち」――すべての不和闘争を排し、地上を平和ならしめんとする者。原語εἰρηνοποιός は文字通り「平和を作る者」の意であって、聖書にはただここだけである。またその動詞形εἰρηνοποιέω は新約中一度だけキリストの贖罪について用いられ、彼の血が神と宇宙万物との間に「平和を作り」と言う（コロサイ一20）。形容詞、動詞いずれの場合においてもラビのヘブライ語「平和を作る」の影響の下にあることは明瞭であり、従って「平和」εἰρήνη と言いてもギリシャ語的意味よりはヘブライ語のシャローム（平和）の意味に解すべきである。そしてユダヤ人はこれを極めて広義（無事、安全、平和等ほとんどすべての幸福、安定なる生活を意味する。）に解した。ただこれをもって神から来るものと考え、殊に預言者は単なる地上の平和をもって平和とは言わなかった（エレミヤ六14）。すなわち彼らにおいては神による真の幸福を意味した。従って新約におけるεἰρήνη も最も広き意味においてすべての事物の正常なる状態、特に神に罪を赦されたる平和なる心（ロマ五１）、また最後の日における永遠の心の平和を意味する。しかし山上の説教の場合における平和は神との平和の意ではない。人と人との関係における一致和合を作り出す者の意である。しかして真の平和なる心は、キリストにより神と和らぐことによって得られる（第二コリント五18－21）。すなわちかかる人のみがキリストに倣(なら)いて人と人との間を和らがしむることが出来る。ここに出発せざるすべての和睦仲裁、平和運動は、結局羊の皮を被った狼である。「神の子にしていただく」――直訳は「神の子と呼ばれるであろう」である。「呼ばれるであろう」とは「認められるであろう」の意ではなく、「なるべし」「していただく」である。最後の日において神の子として神の国の一員となることが出来るとの意。神は平和の本源であり、彼は誰よりも「平和を作る者」であり給う。またキリストが神の子であり給う所以(ゆえん)は、彼も神の如く最大の「平和を作る者」であり給うところにある。従ってわたし達もまた平和の人となる時、最もキリストに似、神に似る者、然り、神の子となることが出来る。七つの「ああ幸いだ」に対する約束のうち、「神の子にしていただく」が最大なるものである。七福の最後のものたるに適(ふさ)わしい。しかしてこれはキリストがいかに平和を尊ばれるかを示す。真に平和の人にのみキリストの心は宿る。」[24]。

10－12節について。「ああ幸いだ、信仰のために迫害される人たち、天の国はその人たちのものとなるのだから。わたしゆえに罵(ののし)られたり、迫害されたり、あらん限りの根も葉もない悪口(わるくち)を言われたりする時、あなた達は幸いである。小躍(こおど)りして喜びなさい、褒美(ほうび)がどっさり天であなた達を待っているのだから。あなた達より前の預言者たちも、同じように迫害されたのである。」

「10－12節に関しては10をもって原形とし11－12をその説明であるとする見方と、反対に11－12の方が原形で10はその精神を抜き書きしたものと見る説がある。10［を］、「ああ幸いだ」の一つとして数うべきか否かについて議論がある。数えんとする者は、「信仰のために迫害される人たち」が前の七つの総約であること、また約束が最初のもの（3）と同じであること、かくして八つの「ああ幸いだ」が美しき「金環」を形づくることを言う。反対者は、マタイは七数を好むこと、約束が第一と同じであること等を理由とす。このほか双方にそれぞれ尤もなる理由があって俄かに決し難い。[25]「信仰のために」――直訳すれば「義のゆえに」であって、次節の「わたしのゆえに」と同じ意味である。「迫害される人たち」――原語は完了形の分詞であるけれども、現在の意味であろう。アラミ語の分詞には時制がない。「迫害される」とは新約においては主として宗教上の迫害を意味する（一〇23、二三34、ヨハネ五16、行伝七52、ガラテヤ一13等々）。従って「義のゆえに」は無くとも意味は明瞭である。これを「霊に」（3）と同じようにマタイの追加とみる学者があるのはこのためである。「天の国はその人たちのものとなるのだから」――3節の説明参照（3節と同様現在形である。アラミ語原本には「その人のもの」とあって動詞がなかったわけであるから、「なり」と現在動詞を補充すべきである。しかしアラミ語法に従い無時制に解し、本来の約束でありながら今既に天国に入る権を有つ（ヨハネ一12）ことを言うと見るべきであろう。）キリストは義である。故にキリストに従うときわたし達は不義のこの世に悪(にく)まるるは当然である（ヨハネ一五18、第二テモテ三12）。否、義のためにキリストと共に責められ、苦難を受くること、そこにクリスチャンたるの証拠がある。従って「ああ幸いだ」のすべてがこの一つに要約され結晶されるとも見ることが出来る。この意味から本節をもってその最後とみる説は強い。以上七（八）つの「ああ幸いだ」は信者をこれらの種類に分類したのではなく、その心境、態度、境遇がかくある者はというのである。またその信仰の発展を示すものでもない。ただ普通社会においては蔑視され不幸とされる者が、神の目からすればかえって尊くかつ幸いであるというのである（ツァーン）。」[26] と。

「11－12　前節が重要であるため特に付加された説明、あるいは実際訓である。以下第二人称に変ずることがそのことを示す。従って各節を、あるいは両節を一つの「ああ幸いだ」と見るのは誤りである。「わたしゆえに」――前節参照。「わたしの弟

子であるために」（直訳「わたしの名のゆえに」）（一〇22）と言うに同じ。第一ペテロ四16には「むしろこの［クリスチャンたる］名において神の栄光を顕せ」とある。ルカは「人の子のゆえに」。またルカには「人に憎まれる時」と「人」がある。マタイなし。無き方がユダヤ的である。「罵られる」――第一ペテロ四14。イエスもまた罵られた（マルコ一五32）。「根も葉もない」――直訳「嘘をついて」。「わたしゆえに」があるから不要である。他人の書き入れであろうとされる。「あらん限りの……悪口を言われる」――ルカには「除名されたり、罵られたり、悪様（あしざま）に言われたり」とある。除名とは礼拝堂から除名することであり（ヨハネ九22、一二42、一六２）、「罵られたり」はマタイから来たのであろう。「悪様に言う」の直訳は「あなた達の名を悪として棄てる」である。「する時」――「ならば」ではない。迫害は付き物である。「小躍して喜びなさい」――直訳「喜べ、かつ歓呼せよ」。ルカは「躍りあがって喜びなさい」と言う（直訳「喜べ、かつ躍れ」）。欣喜雀躍せよである。なおルカには「その日には」とある。迫害の日に、である。迫害にかかわらず、でなく、迫害を喜べ、である。迫害自身が恩恵である。「褒美」――これをもってキリスト教をユダヤ教と同じく報酬教とみるのは当らない。もちろんパウロの救済観（ロマ四４、九14－18）と矛盾しない。「あなた達より前の預言者たち」――旧約の預言者を指す。新約の使徒または伝導者に非ず。ルカにはこれが無い代わりに「あの人たちの先祖も、同じことを預言者たちにしたのである」とある。この方が原形であろう。キリスト教に迫害は付き物である。迫害は栄光の前提である（ロマ八17、第二テモテ二12）。キリストと共に苦しみ、キリストの苦難の欠けたるを補うところに（コロサイ一24）クリスチャンの生命があり、特権がある。苦難なくして神の国に入らんとするは、冬を経ずして春に到らんとするほど不可能である。故に迫害苦難は神の賜う最大の恩恵である（ピリピ一29）。わたし達は苦難を喜ぶ（ヤコブ一２、第一ペテロ四13）。今の苦難は来るべき栄光に比し物の数ではないからである（ロマ八18）。まことにこの七つの「ああ幸いだ」は、世に虐げ呵（さいな）まるる者に対する慰藉（いしゃ）の言葉であると同時に、真の宗教と道徳の根底を据えるものであり、また社会通念を顚倒する大革命の烽火である」[27] と。

――我々は塚本虎二の「山上の説教（五―七章）」の全体の構成に関する分析によって、山上の説教の中心思想及びその全体の精神を剔出し、その精神を山上の説教を解釈する観点・視点として、実際に「幸福なるかな」（五１－12）の詳しい塚本虎二の解釈を検討してきた。つまり、山上説教の中心思想は隣人愛を意味する、旧約の成就である黄金律（七12）にあること、しかしながらその愛の実行は、山上の説教の目的・精神ではなく、その精神は「天国に入ること」にあり、その「天国に入ること」とい

う目的のための手段であり、神が完全である如くに完全になるための資格・条件にすぎないのである。従って、山上の説教の全体の精神・目的は「如何にして天国に入るか」にあると、塚本虎二は発見しているのだ。その山上の説教全体の精神・焦点を、「山上の説教」を解釈する「観点」として定めて、塚本虎二は、それを解釈している。我々は「幸福なるかな」（五１－12）について詳しい註解を見てきた。つまり「貧しい人たち」「悲しんでいる人たち」「義に飢え渇いている人たち」――一見すると消極的で不幸であると思われるそれらの人たち――においても「天国に入る」ための積極的資格、「天国における徳」を発見しているのである。それは、「じっと我慢している人たち」「憐れみ深い人たち」「心の清い人たち」「平和を作る人たち」が積極的に「天国に入る」ための資格、「天国における善徳」を明らかに持っている人々と同様である。――かくして、塚本虎二の「新約聖書中一番人に知られていながら一番解釈が難しく、しかも実際的に大きな問題となる」山上の説教の、「幸福なるかな」の解釈を聞いたので、我々はそれに対する批評を試みることに向うことにする。

まず「山上の説教の読み方」において、塚本虎二が取り出した、それを解釈する「観点」――「愛の実行それ自身が目的ではない。これは天の父の如く全くなって、天国に入る資格を得るための手段である。すなわち、如何にして天国に入るか、これを教えるのが山上の説教全体の精神である。そしてこの観点から説教全体を見る時、その一言一句ことごとくがここに焦点していることを発見する。」[28] ――を問題にしたい。塚本虎二の発見した山上の説教の全体の「精神」がはたして山上の説教の解釈の視点たりうるか、ということである。

なぜならば、塚本虎二自身が次の如くに言っているからである。「山上の説教は天国に入る道を教えたものである。すなわち天国本位に生き、天に宝を積むことだけに専念して地上のことを考えるな、否地上では貧しい者、悲しむ者、飢え渇く者、また迫害される者であって、ただ柔和と義と憐れみと平和とを求めよ、一言にして言えば、すべての人を愛して神の如く完全となり天国に入ることを求めよ、というに帰する。飽くまでも来世的また終末的である。しかし同時に極めて現世的であって、地上生活においては今までかつて説かれたことのない最高水準の道徳人たれと教える。極端に来世本位であると同時に極端に現世的であるところに、イエスの他の教訓と同じく山上の説教の特徴がある。しかし果してかかる最高水準の道徳が実行可能であるかどうか、これが問題である」[29] と。そして塚本虎二は、最高水準の道徳が「実行可能であるばかりでなく実行極めて容易である」理由・根拠として「イエス・キリスト」に対する彼の信仰を持ち出す。「説教はいかに実行困難に見えても、誰でも負い遂げられる軽い軛［マタイ一一28－30］でなければならぬはずである。そしてこのことはイエ

スの福音が弱い小さい、厳格な律法に耐えない人たち相手のものであることを考える時、むしろ当然である。わたしの信ずるところによれば説教が福音であって律法でないこと、すなわち、「律法はモーセをもって与えられたが、恩恵と真理とはイエス・キリストをもってあらわれた」（ヨハネ一17）ことを忘れ、イエスをもってモーセに代わる新しい立法者と考え、説教をその新律法の宣言と見たところに根本の誤りがある。説教は他のすべての新約の道徳と同じく、律法でなく福音である。裁かんとするものでなく、救わんとするものである。しかしこれを守って救われるのでなく、救われた者が喜びと感謝とをもって守るものである」[30] と。従って、もしそうであるならば、山上の説教の「精神」の根本に「福音」というものが、さらには「イエス・キリスト」に対する「信仰」というものが在るということになる。つまり「これを守って救われるのでなく、救われた者が喜びと感謝とをもって守るものである」のであるから、「救われた者」つまり「救い」というものが、「天国に入る」ための最高水準の道徳よりも先にあること、その「救い」は「イエス・キリスト」を信ずることによって実現するのである。従って、「天国に入ること」（神の子となること）は、終末的・来世的・将来的「約束」であって、「救い」・「福音」が実際に現実的に先にあるから、その「前味」にあづかることが出来るとしても、事実ではない。従って「事実」でないものを「観点」・解釈の視点とすることは出来ない。「福音」こそ「山上の説教」の解釈の視点でなければならない。「福音」とは「神の国の福音」（「悔改めよ、天の国は近づいた」）であり、塚本虎二のその解釈は「「近づいた」とは近づきつつあり、ではない。近くに来ている、既に近くに来てしまっている、の意である。既に神の国は戸の外まで来ているから寸時（すこし）も早く悔改めて福音を信じ、神の国に入れ、と言われたのである。」[31] 或は「イエスが来られたこと、神の国が来臨したこと、そのことが福音であった。神の国が来たから、悔改めてこれに入れ、というのが福音であった」[32] であるから、神の国の来臨の事実が「福音」ということで言われていることである。従って、「天国に入ること」という将来的・終末的・来世的「約束」よりも先に「神の国の来臨」（救い）という事実があるので、山上の解釈の視点は、福音書の著者マタイが視点をそこにおいている如く、その事実に置くべきである。また「イエス・キリスト」に対する信仰がその山上の説教の教えの前提にあるということも、イエスを神の子・キリストと信ずる、或はイエスは「まことの神にしてまことの人である」と信ずるということであるから、「イエスが来られたこと、神の国が来臨したこと、そのことが福音であった」ということであるから、「神の国の来臨」の事実ということ、つまり人イエス（まことの人）のところに既に神の国（まことの神）が来臨しているという事実を指し示しているということだ。従って、この場合においても、「神の国

に入ること」という将来的・終末的・来世的「約束」よりも、神の国の来臨という事実が先であり、「約束」はこの神の国の来臨という事実を前提しているといわざるをえない。それ故に、山上の説教を解釈する観点・塚本虎二の視点は、「神の国に入ること」という「約束」におかれているのではなく、実質的に「神の国の福音」・「神の来臨（福音そのもの）」に置かれていると做さざるをえない。

次に塚本虎二のキリスト論を問題とせざるをえない。「すべての人を愛して神の如く完全となりて天国に入ることを求めよ」という山上の説教は「飽くまで来世的また終末的である。しかし同時に極めて現世的であって、地上生活においては今までかつて説かれたことのない最高水準の道徳人たれと教える。極端に来世本位であると同時に極端に現世的である」[33] という二元論の基には、塚本虎二のキリスト論つまり「イエスはまことの人にしてまことの神である」ということがある。換言すれば「イエスが来られたこと、神の国が来臨したこと、そのことが福音であった」[34] ということである。つまり、塚本虎二はイエスが我々の世界にこられたということは、同時に神が歴史的世界に出現した、来臨したということである。そして、このままであると、イエスに対する信仰は「まことの人である」に対する信仰と「まことの神である」に対する信仰に分裂せざるをえないであろう。その上、これらの信仰は結局行き詰らざるをえない。なぜなら「まことの人であり、まことの神である」イエスが十字架に架けられ、その死によって「まことの神・まことの人」という歴史の中に現われた姿形は消滅してしまうからである。それにもかかわらず、復活ということが言われることができるためには、歴史的世界に現われた「まことの神・まことの人」という姿形を離れたものでないが、それらの根底にその姿形を復活させる積極的なもの、まことの「まことの神・まことの人」、つまり「子の神キリスト」が実在するということがなければならない。「父なる神」が「子の神・キリスト」を通して働かれることによって、「子の神・キリスト」に於て、イエスの姿形を復活させられたということでなければならない。従って「まことの神であり、まことの人である」歴史的世界に来られたイエスの姿形と「子の神・キリスト」とを厳密に区別しなければならない。つまりイエスの誕生に際して、「その名はインマヌエルと呼ばれるであろう。これは、「神われらと共にいます」という意味である」（マタイ一23）と言われているように人間イエスは、「インマヌエルの原事実」を信頼して生きられた、人間の絶対的限界である「子の神・キリスト」において、その「子の神・キリスト」を完全に表現された即ち「まことの神であり、まことの人である」と呼ぶほかはない人であった。十字架の死、歴史的な姿形が消滅した後においても、インマヌエルの原事実において、「父なる神」によって「子の神・キリスト」に於て復活させられて、何らかの姿形（イエスの場合は生前

と同じ姿形）あるものとして「子の神・キリスト」に於て限界づけられ、生きて働いておられるのである。従って、塚本虎二のキリスト論は、つまり「まことの神であり、まことの人である」というキリスト論は、更に分析されて、「インマヌエルの原事実」における「子の神・キリスト」と「まことの神・まことの人」という歴史の中に現われた姿形とは厳密に区別されなければならない。従って、塚本虎二の「山上の説教」の解釈は、この単純、無条件の「インマヌエルの原事実」、この世界や我々の人生にとって第一義的に「幸いなるかな」と呼ばれるべき「インマヌエルの原事実」が視野にはいっていない解釈であり、せいぜい「神の国に入ること」「神の子となること」は来世的・将来的・終末的な「約束・事柄」であり、現世においては・地上生活においては、その「神の国に入るための資格・条件」を得るために「最高水準の道徳人たれ」「すべての人を愛して神の如く完全となれ」――これによって「神の国に入る」「前味」を体験できる――というのである。まったく二元論的である。「インマヌエルの原事実」における「子の神・キリスト」に於て、「父なる神」は人間（イエスを含めて）を含めて万物を創造され、保存されているのである。つまり「子の神・キリスト」において、天地の始め、天地の終りがあり、時の始め、時の終りがあるのである。そこにおいて現世はあり、来世はあるのである。「子の神・キリスト」に於て、「父なる神」と人との和解があり、そこにおいて人間の救いがあり、滅びがあり、悪魔（罪の頭）は排除されているのである。聖書、マタイ福音書は、端的に、無条件的に、大前提的に「インマヌエルの原事実」から出発しているのであり、「子の神・キリスト」に集中しているのであり、その「子の神・キリスト」から、「父なる神」及び人間のこと・世界のことを考察しているのである、人間・世界の根底に実在する「子の神・キリスト」に立ち帰って、そこから人間のこと・世界のことをその絶対的限界から厳密に、客観的に、科学的に洞察しているのである。同様に人間・世界の根底に実在する「子の神・キリスト」から「父なる神」を究明するのであり、いきなり「父なる神」を信仰するということから始めていない。その場合は「父なる神」がどこに在すかという問題を解決していないのであり、その「信仰」は厳密に客観的・対象的・即事的なそれではないのである。塚本虎二は、「悔改めよ、天国は近づいた」を解釈して「「近づいた」とは、近づきつつあり、ではない。近くに来ている、既に近くに来てしまっている、の意である。神の国は戸の外まで来ているから、寸時（すこし）も早く悔改めて福音を信じ、神の国に入れ、と言われたのである」と言うのであるが、「既に近くに来てしまっている」どころか、我々は「子の神・キリスト」において、我々の根底において、我々は神と一つ、直接しているのである。「神の国に入れ」どころか、「神の国」（神の支配）に於て在るのである、「子の神・キリスト」に於て実在するのである。「福音を信

じ」どころか、信じるも信じないもない、それ以前に、神の方から全く一方的に我々を救いに来ておられるのであり、「福音」とはこの「インマヌエルの原事実」についての報知である。

「幸福なるかな」（五１－12）についての塚本虎二の解釈の批評に移ろう。まず「ああ幸いだ」について塚本虎二は「多幸なるかな、至福なるかな。「ああ禍だ」に対する。その幸福が何んであるかは第三段の理由において明白である。天の国に入ること、そのことが幸福である。従ってこれは幸福の讃美であると同時の幸福の定義である。この一句は彼の全福音の結晶である」[35] と。しかしながら、すでに見たように、我々にとって、この被造的世界にとって、第一義的に、端的に、無条件的に、定義する以前に「幸福なるかな」とは、「インマヌエルの原事実」である。「ああ幸いだ」というのは「讃美」である。また「天国に入ること」が「幸福の定義」であるとは、「インマヌエルの原事実」について不明な者の空疎な註解である。「天の国に入ること、そのことが幸福である」と塚本虎二は言われるが、そんなことはテキストに言われていない。「天国はその人たちのものである」とあり、「天国に入る」どころか、「天国に於て実在する」つまり人は「インマヌエルの原事実」に於て実在するということをいっているのである。従って、「天国に於て実在する」ということが言うことができる（定義することができる）ためには「インマヌエルの原事実」を大前提にしなければ言うことができないのであり、それ故に「天国は彼らのものである」とは「インマヌエルの原事実」に信頼して生きている者の在り方（イエスは「インマヌエルの原事実」に全的に信頼されて生きられた人であるから、イエスのような生き様・在り方のこと）を分析的に言っているのであり、「神の国に入るための資格・善徳」を記述したものではない。（塚本虎二は山上の説教を解釈する視点を「神の国に入ること」に置いておられるが、それが聖書に即していない無理なものであることが、その解釈に現われている。）「ああ幸いだ」という「この一句は彼の全福音の結晶である」と塚本虎二は言うのであるが、それは「ああ幸いだ」ということが讃美の言葉ではなく、人生・世界の第一義・大前提である「インマヌエルの原事実」を指し示しているということが理解されて、言われうることであり、そうでなければ何をいったことにもならないのである。

「神に寄りすがる貧しい人たち」についても、塚本虎二は、「貧しい人たち」とは、マタイにおいても、ルカと同じ「イエスの時代に「土民」（アム・ハアレス）と呼ばれた下層民であるが、それだけでなく、律法を学者、パリサイ人が考えるように厳格に形式的に守らないために、彼らから人でなしのように軽蔑され、圧迫されていた人たち、すなわち、税金取りとか罪人（町の女の類）とか、異教人などを含むのである」[36]

と受けとめて、彼らの客観的・現実的な状況において、「神の国に入る」ための積極的な資格・条件を、彼らはユダヤの社会から、身体的にも精神的にも、経済的にも宗教的にも排除されており、ただただ神に、イエスに依拠しなければ生きられない人たちであるとして、「神に寄りすがる」ということを貧しい人々に見いだした積極的な「神の国に入る」ための資格・条件であると言われる。ところが、塚本虎二の如く、来世的・将来的・終末的に「神の国に入る（神の子となる）」どころか、今現在・現実的に人間は「インマヌエルの原事実」に於てある、イエスはただただそこに時の始め、時の終りがある・天地の始め・終りがある「インマヌエルの原事実」に信頼して生きられた。従って「貧しい人たち」ということで意味されている第一義的なことは、ただただ自分自身の内・外に依拠すべき何も持たず、「インマヌエルの原事実」だけに信頼し、生きられたイエスの在り方、「本当に自分の主体性というものが絶たれているところ、わたしというものが絶えたところで・絶えたところから生きる人」[37] を意味する。積極的には「インマヌエルの原事実」だけに、自分の内や外のもの（自分の能力・社会的権力・金・宗教）に依存して生きるのでなく、唯一「インマヌエルの原事実」に信頼して生きている人、人間の絶対的限界である「子の神・キリスト」に服従されて生きている人イエスの如く自分自身にも自分の外の権威・宗教に依拠せず、そのように「自分を捨て、自分の十字架を負った」（マタイ一六24）人を意味しているのである。これが第一義的に「インマヌエルの原事実」に於てあり、それにのみ信頼して生きる人を「貧しい人たち」は意味している。しかしながら第二義的に塚本虎二の「貧しい人たち」が、当時のローマ帝国の権力者から、さらにユダヤ教の権威者から、身体的・精神的に、経済的・宗教的に排除され差別されている人々であるかぎり、その権力者・権威者から強制的に「自分を捨て、自分の十字架を負うこと」を余儀無くさせられている人々の客観的な在り方は、「インマヌエルの原事実」のみに信頼して生きる人の在り方に近いのである、ただ神を、イエスを頼る外すべない状況にある人々である。実際にイエスの福音とは、端的に、単純に、無条件に、人は「インマヌエルの原事実」においてある、「神の国」（神の支配）がそれぞれの人のところに直接来ておられる、と至極単純な教えであったから、「貧しい人々」は注目せざるをえなかったのである。この限りにおいて、勿論「神の国に入るための資格条件」ではなくて、塚本虎二の理解する「貧しい人たち」が「インマヌエルの原事実」のみに信頼して生きる生き方・在り方に近いということができるので、「「霊における」を「神に寄りすがる」と訳するのは、文字の上からはすこし無理であるが、実際問題としてはイエスが意味されたものに当っていると思う」[38] と言うことが出来るのである。「イエスの意味されたもの」とは「インマヌエルの原事実」に信頼して生きた人の在り方を「貧しい人たち」で意味されて

いるのである、要するにイエスはイエスの如き在り方・生き方をする人を第一義的に「貧しい人たち」で意味されておられるのである。第二義的に、塚本虎二の解する「貧しい人たち」は前者の在り方に近いという限りで、第二義的に「イエスの意味されたもの」と言いうるのである。

また「その人たちのものとなる」（３）について塚本虎二は「天の国はかかる貧しき人に属する（マタイ一九23－24)。次節以下が皆「[かの日に］慰めていただく」というように未来形であるに対し、本節だけ現在形であるけれども、いま既に天国を有しているとの意ではなく、他と同じく未来の約束であろう。しかし、神の約束には必ず保証がある。涙をことごとく拭わるるのは神の国来臨の時であるが（黙示二一１－４)、わたし達は泣きながらも天の国の前味を喜ぶことができる」[39]と解釈するが、「その人たちのものとなるのだから」を「神の国に入る」将来的・来世的・終末的約束と理解しているから、このように解釈するのであろうが、我々の如く、「インマヌエルの原事実」に於て、それを信頼して生きる人の在り方を意味すると解釈するものにとっては、「その人たちのものとなるのだから」とは「インマヌエルの原事実」に信頼して生きる者にとって、「インマヌエルの原事実」によって支えられ、生かされている、「子の神・キリスト」（人間の絶対的限界）において、「父なる神」の働きによって生かされ、支えられているということを意味しているのである。「インマヌエルの原事実」に於て人が存在する、「父なる神」と「子の神・キリスト」に於て人は直接的に限定されている、直接的に一つである――このことは根源的に現在のことである。この神（永遠）と人との根源的な関係に於ては、人間の側から決して神に至りつくことができない、いわば無限の時間・空間がそこに介在するのであり、その無限の時間・空間を超えたところに、つまり時間・空間の終末のところに、神（神の国）は実在するのである。従って、絶対現在において、この神と人との直接的な関係が成り立つためには神（永遠）の方から一方的に・自由に、無限の時間・空間を超えて、従って時間・空間の終末のところで人に関わってくる・人間を救済に来られる限りにおいてなのである。つまり、そこに於て、新しい時間・空間（時空の始め）が神の創造・保存の形式として成り立ってくるのである。この意味で「神（永遠)」と「人」、創造者と被造物（人）との関係は、絶対に不可逆的な不連続の連続・断絶の連続のそれである。従って、絶対的に現在的な「インマヌエルの原事実」という神と人との直接的な関係は、人間の側からすればそこに絶対に到り着くことができないので、終末的なこと・未来的なこと・約束として時間的に「未来形」で表現せざるをえないのである。勿論、それは「いま既に天国を有している、」「神の国に入っている」ということではない、どこまでも「インマヌエルの原事実」において限界づけられ、神の国・神の支配と直接

一つである、人は「子なる神・キリスト」に於て「父なる神」によって限界づけられ、「父なる神」の働きによって支えられ、生かされている、ということを意味しているのである。神の国の来臨の時（未来の約束）と現在において「天国の前味を喜ぶ」（現在の保証）とは「インマヌエルの原事実」における神と人との絶対に不可逆的な、不連続の連続の関係を言わんとしているのであると理解すべきであろう[40)]。

「ああ幸いだ、悲しんでいる人たち」について、塚本虎二は「内的、霊的に解すべきである。従って単なるこの世的の悲しみを意味しない。またその人の信仰を前提することも言を俟たない。キリストを信じ敬虔をもって過さんとする者に臨む一切の煩悶、苦難、不幸を嘆き悲しむ者を含むと解すべきである。ルカの方は言葉通りに泣き悲しむ者、地上生活に恵まれざる不幸者たちを指すと解すべきである。ただし事実上はほとんどすべての場合において社会的に不幸なる者がマタイにいわゆる「霊に貧しい人たち」「義に飢え渇いている人たち」等々がある」[41)]と解釈している。しかし塚本自身後に「内的・霊的」な解釈を撤回して、「悲しんでいる人たち」の客観的・現実的状況において「神の国に入るための資格・善徳」を見ようとしている。塚本虎二は、その内容を語っていないが、「貧しい人たち」の客観的・現実的状況において、「神に寄りすがる」以外に生きられないという積極的なものを見い出した如くに、「悲しんでいる人々」の客観的・現実的状況において、「ただ神を思い、神の国を慕い求めざるを得ない」[42)]何か積極的なものを見ようとしていたのではないかと思われる。――この解釈は、「幸いなるかな」において、単純に、無条件的に、第一義的に「インマヌエルの原事実」を洞察していないものであり、将来的・来世的な「神の国に入るための資格・善徳」を問題にしたものでしかなく、ここで「悲しんでいる人たち」とは「インマヌエルの原事実」に信頼して生きる人のそこにおける在り方・生き方を問題にしているのであり、従ってその原事実に信頼して生きたイエスが、「インマヌエルの原事実」が端的に、無条件に全ての人々に与えられている、「神の国」が全ての人のところに来ておられるのに、そのことに気ずかずに、虚無に翻弄されている（現実的にはローマの権力者やユダヤ教の権威者から差別されて、経済的・宗教的に生きられない状況にある）人々を憐れまれた、悲しまれた如くに、「インマヌエルの原事実」に信頼して生きる人に自然に出てくる「悲しみ、慈悲」を意味しているのである。これとは異なって「悲しんでいる人たち」の客観的・現実的状況において、積極的な「神の国に入るための資格・善徳」を見ようとする塚本虎二の解釈は、その限りにおいて二義的な意味においてイエスの「悲しみ、慈悲」に近いということができる。従って、「慰さめていただく」についての塚本虎二の次のような解釈つまり「消極的に悲しみの原因また対象を取り去られるばかりでなく、積極的に神の国において喜び楽しみ得

ることをいう。従ってこの約束の完成はキリストの再臨の時である」[43] と来世的・終末的な解釈もまったく本末を顚倒したそれである。今、ここに、単純に無条件に実在する「インマヌエルの原事実」に於てある人、それに信頼して生きている人の生き方・在り方について「慰さめていただく」というのである、たとえ「悲しむ」ということがあるにしても「インマヌエルの原事実」には「慰さめるもの」が満ち満ちているということである。野の花、空の鳥さえも「インマヌエルの原事実」に限界づけられた、その分限を守って永遠の生命を映し出しているし、イエスの如くに「インマヌエルの原事実」に限界づけられた、その分限を守って生きている人がいるし、たとえ自分の親しい人が死んでしまったとしても、依然として「インマヌエルの原事実」に於て何らかの姿形あるものとして保たれているということが理解できるし、要するに、「インマヌエルの原事実」においては、悲しみは悲しみとして事実あるとしても、それを覆って余りある慰めに満ち満ちているのである、――「慰さめていただく」とはこのことを意味しているのである。

「じっと我慢している人たち」について、塚本虎二は「普通には「柔和な人たち」と訳されている。「柔和な人たち」は神に似通う善徳を有つ幸福者であって、前の不幸なる幸福者に対する。ここでは神に対する関係［御心に従う者］だけでなく、むしろ主として迫害者、圧迫者等の不正不義を怒らず、復讐せず、穏かなる心をもってこれを忍耐する者を指す。イエスは柔和の王であった。」[44] と解釈する。更に「地を相続する」について、「神の国に入ることを相続の観念をもって示している。この世において嘆き悲しみつつ神の国のために重荷を負い遂ぐるとき、来たるべき日にはその相続人となるのである」[45] と解釈している。――この解釈も、「幸いなるかな」ということで、この人生・世界の第一義・大前提であり、端的に、理由なしに実在する「インマヌエルの原事実」を指し示していることを見ておらず、「柔和な人たち」とは「インマヌエルの原事実」を信頼して生きる人のそこにおける生き方・在り様を意味しているのであり、一切をただただ「インマヌエルの原事実」に自分を限定してきておられる父なる神に委ねた生き方・在り様を意味しているので「じっと我慢している人たち」の如く自分自身の善徳に頼っている生き方ではない。「イエスは柔和の王であった」と塚本虎二は言うが、「インマヌエルの原事実」に於てある、そこに来ておられる「父なる神」に信頼し、一切をその神に委ねた第一義的な生き方・在り方を指すのでなく、将来的・来世的神の国に入るための客観的・現実的状況における「善徳」を意味するのであれば、「じっと我慢している人たち」とは二義的なものにすぎない。

「義に飢え渇いている人たち、」について、塚本虎二は「神の義を飢え渇く如く熱望する。それなくしては生き得ないため喘ぎ求める。ルカはただ「飢えている人たち」

と言い、「渇く」及び「義に」を省く、従って事実上飢えている貧しきガリラヤの信者たちに、その苦難から免れ得ることを約束されたのである。ルカの方が原形であろう。」[46] と解釈され、また「満足させられる」について「何をもって満足されるかを示さないが、もちろん義をもってである。［来世的・将来的神の国に入って］願いが聴かれて神の前に完全なる者となり得ることである」[47] と解釈されている。――この解釈も、「ああ幸いだ」が、単なる讃美の言葉ではなく、「インマヌエルの原事実」を指し示しているということを見ておらず、従って「義に飢え渇いている人たち」が「インマヌエルの原事実」を信頼し、そこを堅く踏えて生きる人の在り様・生き方を記述したものであること、つまり「インマヌエルの原事実」に実在する「神の義」のみを自分の生き方の規範として求める、そのような在り方、「原事実」にのみ信頼して生きられたイエスの如き生き方を記述したものであることを洞察せず、ただ来世的・終末的「神の国」に入るための善徳・資格を記述したものにすぎないのである。従って「満足させられる」ということもどこに実在するかわからぬ「神の義」によって満足させられる、神の国において完全な者となるというにすぎない。そうではなく、「インマヌエルの原事実」に生きる者にとって、そこにある神の義なしには生きる方途が立たないのであり、そこには無限の義があるのであり、それによって「満足させられる」のである。「事実上飢えている貧しきガリラヤの信者たちに、その苦難からも免れ得ることを約束されたのである」というのも飢え渇いている客観的・現実的状況において「天国に入るための積極的な善徳」を見い出そうとする解釈は、第二義的に言われうることである。

「憐れみ深い人たち」と「憐れんでいただく」についての塚本虎二の解釈は、「他人の不幸患難に同情しこれに助けの手を伸ばす者。新約においては、人間相互の関係において神の要求し給う好意、親切を言うた。親切なサマリヤ人がこれであった。」[48] そして「もちろん神に憐れまるるのである。憐みある者には憐れみをもって報い給う。しかしここではそればかりでなく、最後の審判における憐憫を意味する。憐憫自身であり給う神の国に入るには、神の如く憐れみある者でなければならぬ。」[49] というものであった。――この解釈も「ああ幸いだ」において「インマヌエルの原事実」を見てとっていない解釈であり、従って「憐れみ深い人たち」についても、「インマヌエルの原事実」に於て、それを信頼して生きている人の在り方・生き方を記述したものつまり「インマヌエルの原事実」に於てある他の人・他の物は、神の憐れみ・慈愛の下にあるものであるが故に、その原事実に生きる者は、他の人・他の物を憐れまざるをえないのであること、それを記述したものであると理解することができず、ただ来世的・終末的「神の国」に入るための、この地上で、現実的に「憐れみ」という資格・善徳を持っているというにすぎない。このような客観的・現実的状況において「憐れ

み深い人たち」とは、第二義的に言われることにすぎない。

「心の清い人たち」と「神にまみえる」についての塚本虎二の解釈は、「心の純な、真実な者、エペソ六５にいう「真心」の者であろう。完全無条件に神に帰依することによって心を新たにし、すべて神に逆らうものの肯定を許さざること。」[50] 及び「最後の日において神と顔を対することが出来る。心の清浄なる者のみが神を見得ることについて詩篇二四３－４、ヘブル一二14、ヤコブ四８を見よ。全く罪なき潔き者となることは最後の日にのみ可能である。もしわたし達がひたぶるに心を神に傾け尽して二心でさえないならば、最後の日にはすべての罪から潔められて神を目のあたりに拝し得るというのである」[51] というものである。――この解釈も「ああ幸いだ」というのは「神にまみえる」幸いを讃美する言葉とのみとらえて、端的、無条件的人生・世界の第一義・大前提である「インマヌエルの原事実」を指し示しているのだと理解することができず、その「原事実」の分析的な一面である「神にまみえる」ということを、讃美しているのであるとしか理解していないものであり、従って「心の清い人たち」が「インマヌエルの原事実」を信頼して生きる人の有様・生き方を記述したものとは理解できず、ただ現実的・客観的な状況において「ひたぶるに心を神に傾け尽して二心さえない」ことを意味しているにすぎない。そして来世的・終末的「神の国」に入るための善徳にすぎないのであり、最後の日に神の国に入って神をまのあたりに拝することができる」という約束にすぎないのである。ところが「インマヌエルの原事実」に於ける「子の神・キリスト」のところが時の始めであり、時の終りである、天地の始めであり、天地の終りであるのであり、換言すれば「父なる神」は「子の神・キリスト」に於て、人を含めて万物を創造され、保存されているのである。それ故に「インマヌエルの原事実」を信頼して生きる人［誰よりもイエスはそうであった］は、「子の神・キリスト」において、「父なる神」と対している、接しているのである、父なる神によって支えられ生かされているのである。そして「子の神・キリスト」に於て、人の心は断たれているのであり、「父なる神」の働きによって清い心が引き起こされるのである(悔い改める)。従って、「心の清い人」は「子の神・キリスト」を通して「神にまみえる」ことが出来るのである。塚本虎二の地上生活において、客観的・現実的状況において「心の清い人たち」は第二義的に、「心の清い人たち」を意味することができる。

次に「平和を作る人たち」と「神の子にしていただく」についての塚本虎二の解釈は、「すべての不和闘争を排し、地上を平和ならしめんとする者。新約における εἰρήνη も最も広き意味においてすべての事物の正常なる状態、特に神に罪を赦されたる平和なる心、また最後の日における永遠の心の平和を意味する。真の平和なる心は、キリストにより神と和らぐことによってのみ得られる。すなわちかかる人のみがキリストに

倣(なら)いて人と人との間を和らがしむることができる。」[52]及び「「神の子と呼ばれるであろう」とは「認められるであろう」の意ではなく、「なるべし」「していただく」である。最後の日において神の子として神の国の一員となることが出来るとの意。神は平和の本源であり、またキリストが神の子であり給う所以は、神の如くに最大の「平和をつくる者」であり給うところにある。従ってわたし達もまた平和の人となる時、最もキリストに似、神に似る者、然り、神の子となることができる」[53]ということである。――この解釈一見我々の解釈に似ているようであるが根底から異なっている。第一に「ああ幸いだ」において、「インマヌエルの原事実」の分析的一面である「神の子にしていただく」幸いを讃美した言葉にすぎないと解釈し、「幸いなるかな」という端的に、無条件的に、唐突に、人生・世界の第一義・大前提として言われていることにおいて「インマヌエルの原事実」が指し示されているということを見てとっていないものである。第二に「平和を作る人たち」ということで「インマヌエルの原事実」に於てある、それを信頼して生きる人（イエスが最も典型的なそれである）の生き様・在り方を記述したものであることを理解していないものである。「インマヌエルの原事実」においてつまり「子の神・キリスト」において「父なる神」と「罪なる人」との和解・平和が実在するのであり、その「原事実」に信頼して生きる人は、その和解・平和を映し出さざるをえないのである。第三に塚本虎二は「平和を作る人たち」の客観的・現実的状況における、終末的・来世的、神の国に入るための資質・善徳を考えているが、これは第二義的に「平和を作る人たち」といいうるものであり、聖書・イエスの言う意味ではない。第四に、「神の子にしていただく」とは、「インマヌエルの原事実」において、それに信頼して生きている人は、イエスが神の子と呼ばれたように、「神の子」と呼ぶことができるのである。塚本虎二は、「イエスが神の子と認められる」ということと、我々が終末的・来世的神の国において「神の子となる」「神の子としていただく」とを区別しようとしているが、塚本虎二のキリスト論が問題であるのである。我々は「インマヌエルの原事実」に於て限界づけられてあるので、「神の子」であるわけであるが、「インマヌエルの原事実」に気がつかぬ限り「神の子と呼ばれるであろう」ということであるが、その「原事実」において我々が支えられ生かされているということに覚醒すると実際に「神の子となる」のである。イエスの場合も、ヨハネの洗礼（すべての正しいことを成就すること）を受けられた時に神から「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなうものである」と呼ばれたのであり、「インマヌエルの原事実」をただただ、信頼して生きられた、「子の神・キリスト」に実在する「神の御心」を、また和解と罪からの救いを、神の創造する働きを、完全に映し出された限りにおいて、イエスは神の子であったのである。

最後に「信仰のために迫害される人たち」と「天の国はその人たちのものとなるのだから」についての塚本虎二の解釈は、「「信仰のために」――直訳すれば「義のゆえに」であって、次節の「わたしゆえに」と同じ意味である。（義とは「神の義」である。）「迫害される人たち」――原語は完了形の分詞であるけれども、現在の意味であろう。「迫害される」とは新約においては主として宗教上の迫害を意味する。「天の国はその人たちのものとなるのだから」――神の国に入ること［約束］である」[54]ということである。この解釈も「ああ幸いだ」ということは、「インマヌエルの原事実」に信頼して生きる人の在り方の一つである「天国はその人たちのものとなるのだから」という幸いの讃美の言葉にすぎないとして、「幸いなるかな」が「インマヌエルの原事実」を指し示しているということを見ていないものであり、従って「迫害される人たち」が「インマヌエルの原事実」に信頼して生きる人（イエスがその典型である）の生き方・在り方つまり神の義のための闘いが必要であることを意味していることを理解できないものであり、「義のために迫害される人たち」の客観的・現実的状況における宗教的迫害のことを意味しており、それは、終末的・来世的な神の国に入るための資格・善徳を言っているのだと言うことであるから、「インマヌエルの原事実」を信頼して生きている人の在り様を意味していない第二義的なものにすぎない。さらに「天の国はその人たちのものとなるのだから」についても「神の国に入ることの約束」がそこに言われているのであると解しているが、「インマヌエルの原事実」を信頼し、堅くそれのみを踏まえて生きる人のリアルな在り方を、言っているのである。

10節に特に付加された説明・実際訓について、「「わたしゆえに罵られたり、迫害されたり……」の「わたしゆえに（わたしの名のゆえに）」について塚本虎二は「「わたしの弟子であるために」と言うに同じである」[55]と註解しているが、人イエスは、自分自身の根底に実在する「子の神・キリスト」（まこと神にしてまことの人）を、自分を捨て、自分の十字架を負うて（つまり人イエスの「わたし」を捨てて）完全に体現された、「子の神・キリスト」に於てある「父なる神の御心」にどこまでも服従され、それを完全に表現された人である。従って人イエスは「子の神・キリスト」・「父なる神の御心」の「名」となられたのである。従って「わたしゆえに」とはイエスがそれに信頼して生きられた「インマヌエルの原事実」（「子の神・キリスト」）のことを言っているのである。イエスに従うとか、イエスの弟子とは、イエスの如くに「インマヌエルの原事実」を自分を生かし支えるものであると承認し・信頼しているもののことである。自分を捨て、自分の十字架を負って、イエスの如く「インマヌエルの原事実」のみを生きる根拠とするものであるのである。従って「わたしの弟子であるために」という塚本虎二の解釈はまとをはずしたものであると言わざるをえない。そ

れ故に塚本虎二の「まことにこの七つの「ああ幸いだ」は、世に虐げ呵(さいな)まるる者に対する慰藉［約束］の言葉であると同時に、真の宗教と道徳の根底を据えるものであり、また社会通念を顛倒する大革命の烽火である」[56] という「ああ幸いだ」の総括的言葉も問題とならざるをえない。ここで「真の宗教と道徳の根底を据るもの」といわれていることの内実は「天の国はその人たちのものとなる」「かの日に慰めていただく」「約束の地なる御国を相続する」「かの日に満足させられる」「かの日に憐れんでいただく」「御国に入って神にまみえる」「神の子にしていただく」「天の国はその人たちのものとなる」であり、これらは来世的・終末的「神の国」に入るための資格・善徳であり、将来的な約束にすぎないのである。従って、それらの「約束」が「真の宗教と道徳の根底を据える」ものではありえない。それらのものは、「インマヌエルの原事実」を信頼して生きる人の在り方を言っているのであり、この「インマヌエルの原事実」こそ、真の宗教と道徳の根底であり、イエスの「さいわいなるかな」とは、この端的で、単純で、無条件で、人生と世界の大前提である「インマヌエルの原事実」を指し示しているのである。「慰藉の言葉」「約束の言葉」ではないのである。イエスの言葉は「子の神・キリスト」から湧出してくるのである、「父なる神の御心」の映しであるのである。

［二〇一三・一二・二〇］

註

1） 塚本虎二『イエス伝研究　第二巻』平成元年　聖書知識社

2） ibid. p. 289

3） ibid. pp. 291－293

4） ibid. pp. 293－294　なお塚本虎二はここで「一方では天国の生活を憬(あこが)れさせるためにこの世的に不幸な生涯を勧め、他方では天国人たるの資格を準備するための最高水準の道徳人たれと教える。前者は誰にでも出きることであるとしても、後者は果たして実行可能であろうか」と言っているが、前者は「インマヌエルの原事実」においてある人の技術的・経済的側面のことであり、後者はその同じ人の道徳的・宗教的側面のことである。従って、「前者は誰にでも出来ることである」と簡単にすますわけにはいかないのである。塚本虎二は「インマヌエルの原事実」を見ていないのでつまりそれにおいてある人間を見ていないので、このように言うのであろう。その原事実に於てある人間が「貧しい人」といわれる場合にはこの在り方は「誰にでも出来ることである」とは言えない。これまた「果して実行可能であるか」といわざるを得ない如くに困難なことである。

5） ibid. pp. 296－298

6） ibid. p. 293

7） ibid. pp. 289－290

8） ibid. pp. 63－64

9） ibid. p. 64

10） ibid. p. 64

11）　ibid. pp. 64－65
12）　ibid. pp. 64－66
13）　ibid. pp. 22－24
14）　ibid. pp. 25－26
15）　ibid. pp. 66－67
16）　ibid. pp. 67－68
17）　ibid. p. 6
18）　ibid. pp. 68－69
19）　ibid. p. 24
20）　ibid. pp. 69－71
21）　ibid. pp. 71－72
22）　ibid. pp. 72－73
23）　ibid. pp. 73－74
24）　ibid. pp. 75－76
25）　ibid. p. 76
26）　ibid. pp. 76－77
27）　ibid. pp. 78－79
28）　ibid. p. 292
29）　ibid. p. 293
30）　ibid. pp. 296－297
31）　塚本虎二『イエス伝研究　第一巻』昭和六三年　聖書知識社　p. 228
32）　ibid. p. 230
33）『イエス伝研究　第二巻』　p. 293
34）『イエス伝研究　第一巻』　p. 230
35）『イエス伝研究　第二巻』　pp. 64－65
36）　ibid. p. 22
37）　滝沢克己『聖書を読む　マタイ福音書講解』　第二巻　pp. 31－32
38）『イエス伝研究　第二巻』　p. 24
39）　ibid. p. 66
40）　この「インマヌエルの原事実」における不可逆的な絶対の断絶の連続の関係を考えるのに、仏凡一体の原事実を浄土系の経典で次のように表現されているのは大いに示唆的である。一方で『大無量寿経』において、「阿難、仏にもうしていう「法蔵菩薩、すでに成仏して滅度（めつど）を取りたまえりとやせん、未だ成仏したまわずとやせん、（成仏して）いま現にましますとやせん。」仏、阿難に告げたもう、「法蔵菩薩、いますでに成仏して、現に西方にまします。ここを去ること十万億刹（せつ）なり。その仏の世界を、名づけて、安楽という。」（浄土三部経　上　岩波文庫　p. 146）と言い、他方『観無量寿経』においては同じ原事実を「その時、世尊は韋提希（いだいけ）に告げたまう、「汝よ、いま、知るやいなや。阿弥陀仏の、ここを去ること遠からざるを。汝よ、まさに念を繋（か）けて、諦（あき）らかにかの国を観ずべし。浄業を成ぜんためなり。」（浄土三部経　下　岩波文庫　p.44）と言っている。つまり仏凡一体の原事実に含まれている阿弥陀仏によるまったく一方的な関係設定・関係のダイナミックを「ここを去ること十万億刹（せつ）なり」（断絶）と「ここを去ること遠からざる」（連続）という矛盾した表現で言いあらわしているのである。
41）　ibid. p. 67

42) ibid. p. 64
43) ibid. p. 69
44) ibid. p. 70
45) ibid. p. 70
46) ibid. p. 71
47) ibid. p. 72
48) ibid. p. 72
49) ibid. p. 73
50) ibid. p. 73
51) ibid. p. 74
52) ibid. pp. 74－75
53) ibid. p. 75
54) ibid. pp. 76－77
55) ibid. p. 78
56) ibid. p. 79

［以上］